

---

# 無気力少女と日常

和奏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無気力少女と日常

### 【Nコード】

N3659Z

### 【作者名】

和奏

### 【あらすじ】

美人で有名なあの副長補佐は超絶無気力!?

薄桜鬼の世界を舞台とした、千鶴と新選組隊士達の

ほのぼの（無気力）系ストーリー！

面倒臭い…（前書き）

薄桜鬼の2次小説です。

残念な美人さんが主人公のほのぼの系。

無い文才で頑張って書きます。

あ、捏造が結構あります。

だって随想録しかプレイしていないんだもの…

面倒臭い…

皆様ごきげんよう。(棒読み)  
新選組副長補佐の柊優月ひしひぎよつきです。

私達は今なんとなく面倒な状況になっているみたいだねえ。

説明は面倒なので、回想始め。

~~~~~

夜の巡察中…

土方さんが突然消えたので、探していざ発見したら。

目の前に一人の女の子がいます、かなり怯えてこちらを見ていた。  
まあ、怯えてるのは土方さんが刀向けているからなんだろうけど。

その近くにはうちの隊士と見られる死体が。

うっわー…

面倒くせえ……



ちっ……。

「…お前らな…。仕事はまだ終わったわけじゃねえんだぞ。」

「だってもう遅いじゃん。子供はもう寝る時間ですよ。はあー、早く帰ってこの疲れを癒したい…」

「仮にも副長補佐が何言ってるんだ。つーかお前も子供って歳じゃないからな」  
相変わらずきびしいなあ。

そんなこんなで、死体の方は一ちゃんはしめが処理してくれたみたいで、私達はひたすら怯える彼女を引き連れて屯所に戻った。

…続くらしいよ

面倒臭い…（後書き）

一応第一話終わりです。

そこまで面倒くさがりでもないですねw

眠いー…(前書き)

前回の続きです。

あれ？なんかほのぼのじゃないな…？



眠い…

あ、前回の話で回想は終わってますよ。

眠くて言うの忘れてた……。

で。さっき言った“面倒な状況”ってというのは…

この子を殺すか、殺さないかってこの話し合いです。

皆話長いんだもん…眠いよー。

こんなんで時間潰してるくらいなら寝た方が絶対良いつて。

なんでもこの少女は、今私達新選組が探している『雪村鋼道』さんの娘で、彼女も突然消えた父を探す為にここまで来たらしい。

あ、千鶴っていうんだって。

そこで運悪く、……。

もう説明いらなくないか？だいたい皆分かってるでしょ。

いつもだったら、ここらでバツサリってこともあるんだけど、その対象が探している人間に関わっているから皆ぶつぶつ言ってる。

見事に意見が割れてるんですね、はい。

ていうか!!!

この物語はほのぼの系なんだよね？絶対この作者頭いかれてるよね？そうじゃなかったら面倒臭がりの設定の人にわざわざ一人称で物語進めさせないよね!?

聞いてんのか作者よ!!!

私はもう眠いってさつきから何度も言ってますよね!?

しかも何故私をツッコミキャラにする!?!?!あ、ってかこの時代ってキャラって言葉ないよな

すげー!!!文明進み過ぎだろオイ!!! (違う)

「もういやだあああ——!!!」

「いきなりどうした…!？」

今まで黙っていた私が突然叫び出したので皆びっくりする。でしよ  
うね!

てか、まだ私にやらせる気が…!

「…はあ………」

作者に反論するのさえ面倒になった。くそ、末代まで祟ってやる。  
誰に頼もうか…

「…その子は生かしておけばいいよ」

「何でだよ優月!？」

すぐさま私の一言に反応する平助。確か平助も殺すのに賛成だった  
っけ

「お互いの利害は一致しているわけだからさ。鋼道さんが見つかる  
までここにおいとけばいいと思いますかね」

「もし逃げられて他言されたらどうするんだよ!」

私と平助しか喋っていない。ま、皆今私らが話していることと同じこと思ってるから口出ししないんだろっけど。

「逃げられるなんてことはないよー。だいたいね、逃げられる方が悪い。色恋に関してもね」

それでも何か言いたげな平助。(そりゃそうだ)  
どうしたもんかな…

「ユッ…」

「…きやつ……！…！」

「…おッ」

「万が一、逃げられるようなことになりそうだったら…大丈夫、私  
がすぐぶった斬るよ」

先程土方さんがやっていたように、自分の刀を抜き、少女に鋭い刃  
先を向ける。

これは…っーん…あ、いわゆる脅し？

…何で平助までびつくりするの。  
新選組はそんな程度かい。

いや、脅してるつもりはないよ。か弱い女の子をビビらせる趣味はないし。

ただ単に早く話を終了させるためだから。

普段こういうことをしないでばけっとしてるから結構威力があるらしい。(総司いわく)

私はずっと目を細めて刀を元に戻す。

「女の子があんまりそういう物騒な事を言っもんじゃないやねえよ、優月」

「おいおい怖えーなあ…」

新八つつあんと左之さんが茶化したように言う。でも結構効いてるみたいだ。  
やったー

そろそろかな。

で、とどめ。

「だから、殺さないでねー。副長補佐命令だよ。本当眠いから皆さんおやすみー」。千鶴ちゃんもまた明日ね」

「え、あ、はい、お疲れさまでした……?」

「…またお前は勝手なことを言っつてすぐ消える……」

後ろから何やら土方さんの声が聞こえたけど、そこはするーってやつで。

途中で止めなかったあなたが悪い。

とりあえず、問題の彼女にもまた明日を言っつて私はやっと寝られる、と自室に戻るのでした。

ああ、ちなみに総司は私の後ろに黙っつてくっついていた。相当眠かっつたんだろうね。

部屋に戻る途中で振り落としたけど。







眠いー… (後書き)

ー応出会い？話は終わりです！  
次からやっどほのぼの^^

始まりそうで始まらない(前書き)

何がって、ほのほのが、ですよ！

始まりそうにもないじゃないか！

あらずじと本編の差がすごい事に気がつきましたw

“日常”っていうのは、主人公の日常ってことでしょうか

始まりそうではまらない

連絡の途絶えた父様を捜しに京を訪れた私は彼らと出会った。

誰もが恐れる“人斬り集団”と名高い【新選組】。

ある夜ひょんなことで彼らの秘密に触れてしまったのだ。

本来なら殺されてもおかしくないのだが、私は新選組の屯所に男装してここで生活することを許された。

事実上の監禁でも窮屈な毎日だが命は助かったのだ。

私を助けてくれたのは、男所帯の新選組で紅一点“優月”と呼ばれるとても綺麗な女の人だった。

落ち着かない中、彼女の一言ですべてが決まってしまったので幹部の人だとは思ってはいたが、その彼女がいつか噂で耳にした“人斬り集団にはとても似つかわしくない美人の副長補佐”だったと知ったときには納得した。

高い位置で結った鮮やかな赤茶色の長い髪に、その辺じやなかなかいないような整った顔。

その美しくもどこか儂さのある空気の彼女に同性の私でも見入ってしまった。

ただ去り際に私に刀を向けてきたその瞳はとても恐ろしかったが…

どのような経緯で彼女が新選組に入隊したのかなどももちろん知らない。

いくら女性でもここに所属している以上は人を斬るということに躊躇いも無いのだろうか。

しかしやはり何かお礼言っただ方がいいと思い、その人を見つけようとしたのだがなかなか会うことができず1番組組長の沖田さんに聞いてみたところ、

「優月は土方さんに言われて仕事がたんまりあって当分部屋から出

られないみたいだよ。君のおかげだね」

と、にこやかに言われちょっと怯えながらも一応「教えてくださってありがとうございます」と言いつつ、私のせいで仕事を増やしてしまったことを申し訳なく思った。

それからしばらく経ったある日。

「お、その顔は…千鶴ちゃんじゃないか。おはようー」

「！おはようございます！！」

今日は当番だったので朝食の準備にとりかかっていたら探していたその人は眠たそうな声で私にあいさつをしてくれた。

「いやー、ごめんね。この間『また明日』って言ったのに結構かかってしまった。だいたいあの量を1カ月以内で、なんて無理にも程があるわ…ほんと疲れた……」

あんなんだから鬼副長って言われるんだ、なんてことを言いながら気だるそうに伸びをする。

「すみません！私のせいで仕事が増えてしまったんですね…？」

「何で千鶴ちゃんのせいになるの？」

「だって厄介者の私が来たから…：やる仕事が増えたんじゃないかって…」

そう言うと、彼女は少し驚いた顔をした。

「は？全然違うよ？確かに君が来たことで仕事増えるかな…っっていうのは考えてたけど。その件は実際ほとんど私は何もしてないよ」

続けて彼女は言う。

「今回ののは、今まで放置してたやつを土方さんにばれて『1か月以内にやらなかったら甘味食べるの禁止』って怒られちゃってね！。ほら、私甘味が無いと生きていけない体質だから」

「そうだったんですか…お疲れさまでした」

じゃあ、沖田さんが言っていたあれはなんだったのだろう。疑問に思っていると、

「…千鶴ちゃんからかつのもいいかげんにした方がいいよ総司、おはよう」

「ごめんね、だってこの子反応が…々面白んだもん。おはよう優月」

いつの間にか私のすぐ後ろに沖田さんがいて、何気なくあいさつを交わしている。

「！沖田さん、おはようございます。あれ嘘だったんですか!？」

「そうだけど？」

なんの悪びれも無く沖田さんは返してくる。

始まりそうで始まらない(後書き)

すみません！

時間がないので、中途半端ですが

今回はここまでー



実は人生で初めての自己紹介です（前書き）

前回中途半端で本当すみません…

一日に二回投稿するの初めてw

働くぞ！！

実は人生で初めての自己紹介です

「ま、総司はいつもそんな調子だからねー。あ、そつだ千鶴ちゃん。」

沖田さんを置いて私に話を振る。

「はい、何でしょう」

「そういえば自己紹介まだだったね。さすがに聞いてると思うけど、私は柘優月。一応副長補佐やってます。ああ、私のことは優月でいいよ」

「雪村千鶴です。突然来た厄介者ですが、こちらこそよろしくお願ひします、優月さん」

優月さんは初めて出会ったときに見せたあの鋭い眼光からは、とても想像できないような優しい微笑を浮かべる。それに少し戸惑いながらも、それに私は応える。

「うわ、あの優月がわざわざ自分から自己紹介したよー!!」

「…珍しいこともあるものなのだな」

「いつもは誰かに言ってもらってるもんな！」

これまたいつの間に現れた斎藤さんと平助君も加わって、しきりに珍しいなどと言っている。

新選組内で彼女は一体どういう存在なのだろう……。

「それじゃ、私はこれ言いに来ただけだから。3か月溜めた仕事を1カ月かけないで終わらせたから疲れてるんで、部屋戻って昼まで寝るね、おやすみー」

私達に何も言わせる暇も与えず一方的にまくしたてた優月さんはそのまま走って去って行ってしまった。

「えっと…いいんでしょうか…あ、でも疲れているみたいだし……」

そう呟いた私に三人が同時に言った。

『あれはただの寝る口実』でしょ「だろ」「だろつ」「

そして沖田さんが一言。

「だいたい優月が自分の仕事をまともにはやるとは思えないからね。」

その言葉に平助君も付け加える。

「総司が言えることじゃないよな」

さらに斎藤さんが

「それも平助が言えたことではない」

と言っただれも何も言わなくなった。

確かにこの中では斎藤さんが一番まともに仕事に取り組んでいるかも…。

それに…

(( ((土方さんが黙っているとも思えない)) ))

その後、案の定土方さんに叩き起こされもの凄く機嫌の悪く刀を振り回す優月さんを見た人がいたとかいなかったとか……。

**実は人生で初めての自己紹介です（後書き）**

一応ですが出会い編終わりました！  
まだ続きます多分きつと恐らく…

あけまして…って遅っ！…！（前書き）

明けましておめでとございます

なんか話が進まなくなったので今回で最終話にしますww  
うたプリの短編頑張ります！wwww

あけまして…って遅っ!!!

皆様、あけましておめでとつございます。  
そして、お久しぶりです。

「遅えーよ!!!」

開始早々土方さんに怒鳴られました、優月です。

「…流石に自分で思ったよ。でもさー、仕方ないじゃん。」

「なんでだ」

すごい形相で睨まれてるんですけど。  
せつかくの美形が台無しですよ。

「なんかね…。良く分からない」

「お前な…。つーかそれ説明すんのが面倒なだけだろ?」

「じゃあ、代わりに僕が説明してあげるよ」

ナイス、総司。



ってかいつの間に行ったのかこの人は…

「なんかね、作者が『うたのプリンスさまっ』とかいう作品の2次創作書いてるんだって」

「それと、この話に何の関係があるってんだ」

「それが大ありなんだよねー。作者はそっちのほうのネタしか考えてなくて、薄桜鬼はほったらかしってわけ」

そうやって総司は溜息をついた。

「なるほどな…。アホか。」

「そ。しかも、書くことがなくなったからって今回で最終話にするんだってー」

？そんな話聞いてないけど…

「まあ、いいんじゃない？これでもう私の出番はなくなったわけで寝ます。おやすみ」

「お前結局寝てばっかだったな…」

あー、最後に言い残した事がひとつ…

「もっと左之さんといちゃつきたかった」

『……………は!?!』

ごめんね、みなさん。実は裏設定で私は左之さんの事が好きだったんです。

「ちょっと、そんなの聞いてないよ、優月!?!」

何故か総司が慌ててる。

「……………えっと……………。俺はどつすりゃいいんだ……………」

お、想い人現る。

「だから連載でいちゃつけなかった分、これからいちゃつこうねー」

「…え、と…あの…」

混乱している左之さんとみんなを放っておいて、私はのそのそと自室に戻った。

睡眠欲が一番優先だからね。

ま、この後なんだかんだありまして、無事に左之さんと付き合っつゝとができました。

そのくだりは教えませんw

これは無気力少女の残念な日常の一部。

あけまして…って遅っ！…！（後書き）

終わらせた、無理やりww

最後の裏設定は唐突に思いついただけです！。

これからはうたプリの方を頑張っていきたいと思います。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3659z/>

---

無気力少女と日常

2012年1月6日14時48分発行